

研究ノート

当院大腸肛門病センターにおける HIV 抗体陽性者数の年次推移と患者背景

桜庭 尚哉¹⁾, 戸上 陽子¹⁾, 柳 富子²⁾, 佐原力三郎³⁾

¹⁾ 社会保険中央総合病院臨床検査部, ²⁾ 同 血液内科, ³⁾ 同 大腸・肛門病センター

目的: 当院大腸肛門病センターにおける過去 10 年間の HIV 抗体検査数, 陽性率の年次推移および患者背景について検討した。

対象および方法: 2001 年 1 月から 2010 年 12 月までに当センターで HIV 抗体検査を受けた 35,562 例 (男性 21,882 例, 女性 13,680 例) を対象とした。測定は CLEIA にて行い, 陽性の場合には確認試験を実施した。

結果: 2001 年の年間 HIV 抗体検査件数は 1,975 件であったが, 2010 年には 7,084 件になり, 10 年間で 3.6 倍に増加した。年間陽性者数および陽性率は 2001 年がそれぞれ 5 例, 0.25% に対して, 2010 年には 53 例, 0.75% に増加しており, これは近年の HIV 感染既知の紹介患者の増加によるもので, 特に他院からの肛門管尖圭コンジローマ合併症例に対する手術依頼件数の増加がおもな要因であった。HIV 陽性例のうち受診時に HIV 抗体検査未実施の症例は 24% (19/79) を占めた。

結論: 大腸肛門病センターを有する当院においては, HIV 陽性患者の肛門疾患手術の依頼が急増しており, 肛門疾患における術前検査・内視鏡検査前検査で HIV 感染症の早期診断・治療が可能であった。特に STD 合併例においては HIV 感染のリスクが高く重要である。

キーワード: HIV 抗体検査, HIV 陽性者年次推移, STD, 肛門疾患, 尖圭コンジローマ

日本エイズ学会誌 15: 179-182, 2013

はじめに

わが国における HIV 感染者および後天性免疫不全症候群 (AIDS) 患者の報告件数はいぜん増加傾向にある。感染経路別にみると日本国籍の異性間の性的接触による感染例が近年横ばいであるのに対し, 日本国籍の男性同性間の性的接触 (men who have sex with men, MSM) による感染例は 2001 年に比べ 2010 年は 2 倍以上に増加している。また, AIDS を発症してはじめて HIV 感染が診断されるいわゆる「いきなりエイズ」の患者が近年増加傾向にあり, 2010 年の新規 AIDS 患者報告数は 453 件で過去最多であった。厚生労働省のエイズ動向委員会は新規 AIDS 患者報告数の増加は潜在的な感染者数の増加と HIV 検査の遅れを示唆していると指摘している¹⁾。

HIV 感染症の早期治療および感染拡大防止のため, HIV 抗体検査および相談の積極的な利用が呼びかけられているが, 近年の保健所における HIV 抗体検査件数は減少傾向に転じており, 医療機関での観血的検査や手術前の感染症スクリーニング検査ではじめて診断される例も少なくな

い。当院は東京都新宿区に位置するエイズ診療拠点病院で, 著者連絡先: 桜庭尚哉 (〒169-0073 東京都新宿区百人町 3-22-1 社会保険中央総合病院臨床検査部)

2012 年 6 月 21 日受付; 2013 年 6 月 7 日受理

本稿の要旨は第 25 回日本エイズ学会学術集会 (2011 年, 東京) にて発表した。

大腸肛門病センターを有する総合病院である。東京都および周辺地域において大腸肛門疾患で外科的治療を要する HIV 患者の治療で中心的な役割を担っている。今回, われわれは当センターにおける過去 10 年間の HIV 抗体検査状況をまとめ, 年次推移および患者背景について検討したので報告する。

対象および方法

1. 対 象

2001 年 1 月から 2010 年 12 月までの 10 年間に当センターで HIV 抗体検査を受けた 35,562 例 (男性 21,882 例, 女性 13,680 例) を対象とした。

2. 方 法

HIV 抗体検査は化学発光酵素免疫測定法 (chemiluminescent enzyme immunoassay, CLEIA) を測定原理とするルミパルスフォルテ HIV-1/2 およびルミパルスプレスト HIV-1/2 (富士レジオ社) を用いて測定を行った。陽性報告例については, 原則的にウエスタンブロット法による抗体検査 (WB 法) と HIV-1 RNA 定量検査 (PCR 法) による確認試験を行った。また, 感染症スクリーニングにおける HBV 検査はルミパルス II HBsAg およびルミパルスプレスト HBsAg (富士レジオ社), HCV 検査はルミパルス II オースおよびルミパルスプレスト オース HCV (オース・クリニカル・ダイアグノスティックス社), 梅毒検査はメディエース RPR およびメディエース TPLA (積水メディカル社) をそ

れぞれ用いて測定を行った。

結 果

1. 検査件数の推移

当センターの2001年の年間検査件数は1,975件であり、以後も2007年までは微増した。2008年から2010年までは著明に増加し、2010年の検査件数は7,084件となり、この10年間で3.6倍に増加した(図1)。当院では2000年より術前検査として感染症スクリーニング検査(HIV, HBV, HCV, 梅毒)を実施してきたが、2008年6月から上部および下部消化管内視鏡前検査に感染症スクリーニング検査を開始した。当センターでは年間5,000~5,500件の大腸内視鏡検査を実施しており、2007年から2010年までのHIV検査件数増加数と近似していることから、内視鏡検査前検査が2008年以降のHIV抗体検査件数の大幅な増加に繋がった。

2. 抗体陽性者数の推移と患者背景

HIV抗体検査の年間陽性者数は2001年が5件で、それ以降検査件数の増加に伴い徐々に増加していき、2010年は53件で過去最多であった(図2)。陽性率の比較では

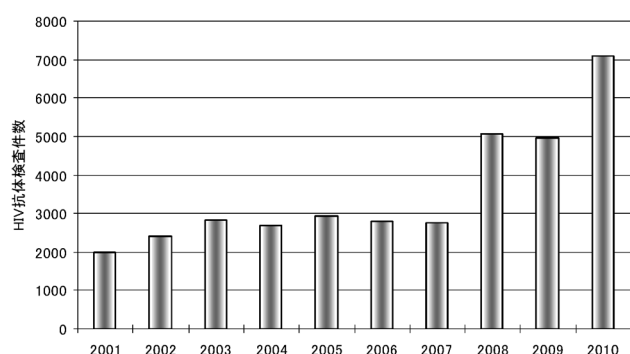


図1 HIV抗体検査件数の年次推移

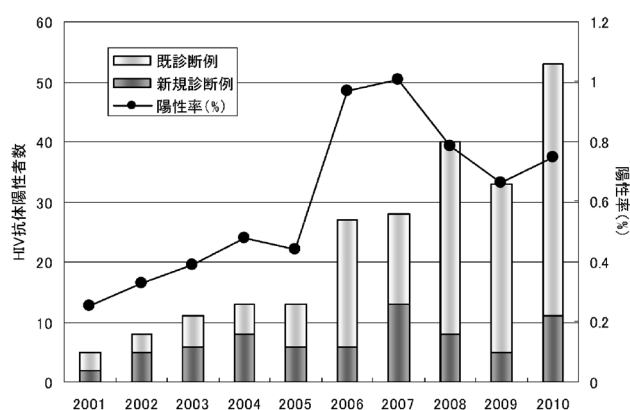


図2 HIV抗体検査陽性者数の年次推移

2001年が0.25%であったのに対して2010年は0.75%であり3倍に増加した。当院の新規診断例は2007年をピークに減少に転じたかに見えたが、2010年は再び増加し過去2番目に多かった。抗体陽性者数全体では2006年以降顕著に増加したが、これは他院より紹介のHIV既知の患者の増加によるものであった。2001年から2010年までのHIV抗体検査の陽性者総数は264例で、そのうち231例がHIV陽性、33例が偽陽性であり、偽陽性率は0.093%であった。また、HIV陽性231例中、新規診断例は70例であった。

年齢分布は30代が39%と最多で、ついで20代35%、40代18%の順で多くっており、わが国のHIV感染者の年齢分布²⁾と同様に若い年代に多い傾向であった(図3)。性別では2006年までのHIV抗体陽性者はすべて男性であったが、2008年以降は女性の陽性者が年間1~2例認められるようになった。

HIV陽性であった231例中、スクリーニング検査を実施しているSTDとの重複感染者数は、梅毒が93例(40.3%)と最多で、次にHBV 22例(9.5%)、HCV 3例(1.3%)と続いた(表1)。

3. 当センターにおけるHIV抗体陽性者数の年次推移と肛門疾患

当院では大腸肛門病センターからの検査依頼が最も多く、年間約7,000件に達する。同科では近年HIV陽性手術症例が増加している。2010年に当センターの佐原らが

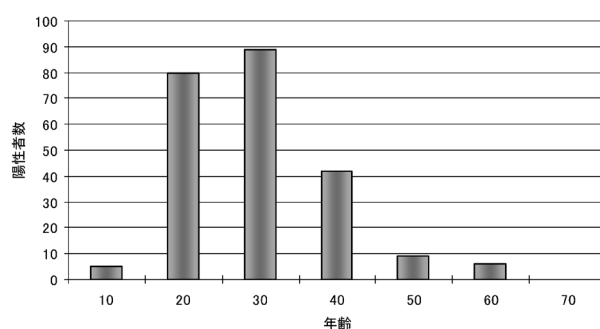


図3 HIV抗体検査陽性者の年齢分布

表1 スクリーニング検査におけるSTD重複感染者数(HIV陽性231例)

疾患名	陽性者数 (陽性率)
梅毒 (RPR, TP 抗体定性陽性)	93 (40.3%)
HBV (HBs 抗原陽性)	22 (9.5%)
HCV (HCV 抗体陽性)	3 (1.3%)
梅毒 + HBV	7 (3.0%)
HBV + HCV	1 (0.4%)
梅毒 + HBV + HCV	0

表 2 術前検査に基づく肛門疾患別 HIV 陽性例³⁾

	前半期 2001～2005 年	後半期 2006～2009 年
肛門疾患手術件数	10,877	7,758
HIV 陽性症例	37 (0.34%)	121 (1.6%)
痔瘻手術件数	2,890	2,545
HIV 陽性症例	18 (0.6%)	41 (1.6%)
尖圭コンジローマ手術件数	98	175
HIV 陽性症例	17 (17%)	79 (45%)

() 内は陽性率 (%)。

表 3 HIV 陽性尖圭コンジローマ：79 例 受診時背景³⁾

	既知+	既知-	計
紹介+	51 (64.6%)	8 (10.1%)	59
紹介-	9 (11.4%)	11 (13.9%)	20
	60 (76.0%)	19 (24.0%)	79

行った検討³⁾では、肛門疾患手術における HIV 陽性症例は 2001 年から 2005 年までの前半期には全体の 0.34% であったが、2006 年から 2009 年までの後半期では全体の 1.6% であり、前半期と比べて 4.6 倍に増加した。また、後半期の疾患別では肛門管尖圭コンジローマが最多で、手術件数 175 例中、HIV 陽性症例が 79 例、陽性率 45% であり、2.2 例に 1 人が HIV 陽性であった(表 2)。HIV 陽性 79 例中、感染既知例は 76% (60/79)、新規診断例は 24% (19/79) であり、4.2 例に 1 人が HIV 感染をしらない例であった(表 3)。

考 察

わが国の HIV 感染者動向は、他の先進諸外国と異なり新規感染者報告数が増加し続けている状況にある。HIV の早期診断・治療および感染拡大防止に HIV 検査は不可欠である。検査によって自らの感染状態をすることは、感染状態をしらない人に比べてリスク行動に留意するようになると報告された。これにより本人の早期の治療だけではなく性的パートナーへの感染リスクを減少させる効果が期待される⁴⁾。

わが国では 1987 年以降、保健所において匿名の HIV 検査が行われているが、近年では HIV 抗体検査件数が減少傾向にある。当院では肛門疾患術前検査で HIV 陽性が判明した患者は増加傾向にあり、医療機関での感染症スクリーニング検査はますます重要になると思われる。

当センターにおける HIV 陽性患者の肛門疾患について検討した。表 2 に示したように 2001 年から 2005 年までと 2006 年から 2009 年の間において、肛門疾患手術症例は

0.34% から 1.6% に上昇した。肛門疾患別では前半期、後半期ともに尖圭コンジローマが最多で、経時変化率も顕著に上昇した。肛門疾患手術例における HIV 陽性率の上昇は尖圭コンジローマ患者の増加によるものと思われた。近年、欧米において HIV 陽性患者におけるヒトパピローマウイルス (HPV) (high risk group) 関連の肛門癌の増加が報告されている⁵⁾。HIV 陽性の MSM は HIV 陰性の MSM に比べ罹患率は有意に高く、HAART 開始後罹患率はさらに増加した。長期生存が可能となってきたが、それに伴い肛門癌を発症する患者の増加が懸念される。

後半期の 175 例中陽性であった 79 例について受診時背景を検討した。表 3 に示したように HIV 既知の紹介患者が約 65% と最多で、特に近隣のエイズ診療拠点病院でも肛門疾患手術ができない病院からの紹介が多くを占めた。また、HIV 陽性のため手術ができない病院からの紹介もこのなかに含まれた。紹介の有無に関係なく HIV 既知症例は全体の 76% を占め、HIV 陽性手術例の増加は感染既知の尖圭コンジローマ紹介患者の増加によるものと思われた。HIV スクリーニング検査で新規に陽性が判明した患者は 19 例 (24%) であった。うち 8 例が紹介患者で紹介医も患者も感染を知らない例であり、STD 罹患者には積極的に HIV 感染を疑うべきであると思われた。新規 HIV スクリーニング陽性患者はすべて当院血液内科紹介となり、確認試験および手術が可能か否かの精査を受け、同時に専任看護師により患者教育が開始される。緊急性の乏しい疾患においては CD4 が 350/μL 以下では抗 HIV 治療を優先され、CD4 が増加したところで大腸肛門科に逆紹介される。他の STD との重複感染では、梅毒および HBV との合併率が高く、HBV あるいは HCV との重複感染例に対しては血液内科と消化器内科が連携して診療に当たっている。また、必要に応じ皮膚科、眼科、歯科等に紹介し、総合病院としての包括医療を行っている。恐怖心により HIV 検査を受けにくくできなかった患者のなかには、満足のいく手術を受けられたことにより、今回感染が判明して

よかったと思う患者がいることは意義のあることである。

当センターではMSMのHIV感染患者の増加につれ肛門疾患症例数は急激に増加している。HIV陽性患者に肛門部観血的治療を行う施設は限られており、また患者側もより専門性の高い治療を望むようになってきていることから、今後とも症例の増加が見込まれる。HIV早期診断・治療に術前および観血的検査前検査は重要と思われた。

文 献

- 1) 厚生労働省エイズ動向委員会第124回報告。
- 2) 厚生労働省エイズ動向委員会平成23年エイズ発生動向年報。
- 3) 佐原力三郎. 当センターにおける近年の肛門疾患手術症例のHIV陽性例の変遷. 日本エイズ学会誌 13 : 54-55, 2011.
- 4) Petroll AE, DiFranceisco W, McAuliffe TI, Seal DW, Kelly JA, Pinkerton SD : HIV testing rates, testing locations, and healthcare utilization among urban African-American men. J Urban Health 86 : 119-131, 2009.
- 5) D'Souza G, Wiley DJ, Li X, Chmiel JS, Margolick JB, Cranston RD, Jacobson LP : Incidence and epidemiology of anal cancer in the multicenter AIDS cohort study. J Acquir Immune Defic Syndr 48 : 491-499, 2008.

Annual Transition of HIV Antibody Testing and Patient Background in Our Coloproctology Center

Naoya SAKURABA¹⁾, Yoko TOGAMI¹⁾, Tomiko RYU²⁾ and Rikisaburo SAHARA³⁾

¹⁾ Department of Clinical Laboratories, ²⁾ Department of Hematology, and
³⁾ Coloproctology Center, Social Insurance Chuo Central Hospital

Objective : We examined the annual transition of the number and positive rate of HIV antibody tests for the past ten years and patient background in our coloproctology center.

Materials and Methods : It was aimed at 35,562 cases (male 21,882, female 13,680) who underwent HIV antibody tests from January, 2001 to December, 2010. Measurement was performed by CLEIA (chemiluminescent enzyme immunoassay), then the additional confirmation test was carried out by Western blot and polymerase chain reaction in positive cases.

Results : The number of HIV antibody tests was 1,975 in 2001 and it increased to 7,084 in 2010 (3.6 times). The number of HIV-positive patients and positive rate increased from 5, 0.25% in 2001 to 53, 0.75% in 2010. It mainly resulted from the increase of HIV-positive patients with anal condyloma acuminatum referred from other hospital for surgery. Among HIV-positive patients, the rate of HIV-unknown patients at the first consultation to our center was 24% (19/79).

Conclusion : In the past several years, HIV-positive patients with anal disorders referred from other hospitals for surgery had markedly increased. Pre-operative and pre-endoscopic HIV testing made early diagnosis and treatment of HIV infection possible. Especially, it was important in the patients complicated with STD.

Key words : HIV antibody test, annual transition, STD, anal disorders, condyloma acuminatum